

ペテロの手紙第一

イエスの弟子になった頃の彼の名前はシモンとって
12弟子の中でもイエスの側近の一人でした
彼がイエスはメシアだと信仰告白した時に
イエスは彼の名前をケファにしました
これはアラム語で岩という意味で
それがのちにギリシャ語のペテロになったのです
イエスが言った通りペテロは使徒たちのリーダーになり
エルサレムでイエスの共同体が始った時その指導者となりました
このあたりのことは使徒の働きに書いてあります
ペテロは最終的には異邦人に福音を伝える使命を与えられ
ローマ帝国を巡って宣教していた
数十年後にこの手紙は書かれました
この書の結びの部分で
ペテロは彼がバビロンと呼ぶローマにいることと
シルワノという同労者にこの手紙を代筆してもらったことがわかります
この手紙は現在のトルコにあたる小アジアのローマの属州にある
複数の教会で回覧するためのものでした
これらの教会のほとんどが非ユダヤ人のクリスチャンで
構成されていて彼らが迫害され周囲のギリシャ人やローマ人の
敵意と嫌がらせにさらされていることを
ペテロは知っていたので苦しみのただ中にある彼らを励ますために
この手紙を書きました
それがわかるとこの書の構成とテーマも理解できます
まずあいさつで始まり次に神をたたえる詩があつて
この書のテーマが紹介されています
それはメインセクションで詳しく述べられ
迫害されているクリスチャンたちに
神の家族としての新しいアイデンティティについて教え
今の苦しみはイエスを証しするためのものと思つて
耐え忍ぶようと励ましているのです
それはまたイエスの再臨の希望に焦点を当てるものでもありました
ではそれらのことについて詳しく見ていきましょう
ペテロは選ばれそして散って寄留している人たちに対する挨拶で
この手紙を始めています
彼はこの手紙を受け取る人々が異邦人であることを明らかにしていますが
旧約聖書の中で神に選ばれたイスラエルの人々
そして寄留者であり異国をさ迷い歩いた
アブラハムの一族を表す言葉を用いて彼らを表現しています
これはこの手紙の中でペテロが何度も繰り返している重要なテーマで
彼は苦しめられている非ユダヤ人のクリスチャンたちに
自分たちはイエスを通して今やアブラハムの子孫に属しているということを知ってほしいと思つていたのです
彼らはアブラハムと同じように誤解され不当な扱いを受け
約束された本当の故郷をめざしてさ迷い歩いていました
ペテロは冒頭の詩の中でもこのことを述べています
彼は聖霊の力とよみがえったイエスを通して

人々を新しく生まれさせ生ける望みを持つようにしてくださった
神をたたえています
神はすべての人がイエスを中心とする新しい家族に加わるよう招いています
その家族は神に愛されている子どもという新しいアイデンティティを持ち
イエスが王として戻ってこられる時
世界は神の愛によって生まれ変わるという希望を持っています
そしてこの希望を持っている人にとっては
苦しみや迫害は逆説的な恵みとさえ言えるのです
なぜならそれらがまるで精錬する火のように
偽りの希望や神から気をそらせるものを燃やし
真の故郷と望みを思い出させてくれるからです
人生の試練とはこのように信仰を深め純粋なものにしてくれるのです
このあとがメインセクションですが
ペテロはそこで今まで述べてきた内容をさらに深めています
まず神の民とされた新しい家族のアイデンティティについて述べています
ペテロはイスラエルの一族について
旧約聖書からさらに印象的なシンボルを用いて
それを異邦人のクリスチャンにあてはめました
エジプトを去ったイスラエルのように
心の帯を引き締め過去の生き方と決別して
新しい未来に向かうようにとっています
彼らは今や荒野を旅する聖い神の民なのです
新たな出エジプトをした民であり
究極の過ぎ越しの羊であるイエスの血によって贖われた民なのです
また新しい契約の民であり神の言葉を深く刻まれ
心を新しくされた者たちです
さらにイエスを土台とする新しい神殿であり
新しい王国の祭司として神に仕え国々に神を代表する者たちでもあります
これらの輝かしいイメージを
迫害されている異邦人クリスチャンにあてはめながら
ペテロは彼らの苦しみを新しいストーリーの中に位置付けています
次のセクションでは
彼らが受けた迫害はこの世界における使命を明確にし
国々に向かって神のあわれみを証しするのに役立つと説明します
ペテロはまず
ローマの支配が抑圧的であってもそれに従うようにと勧めています
彼らが受けている迫害と苦しみは不当なものだとペテロは知っています
しかし暴力による抵抗は何も解決しません
それは言うまでもなく
自分の敵を殺す代わりに敵を愛されたイエスの教えに背くことです
ペテロは次に
主人がクリスチャンではないローマの家庭のクリスチャン奴隷や
妻たちが直面する厳しい状況について語っています
ここで問題となったのはその家の者はみな
家長が拝む偶像を拝むように強制されていたことでした
そのためイエスに忠誠を誓う者たちは摩擦を引き起こすだろうと
ペテロは知っていました

そこで彼はローマの家庭の妻たちも奴隷たちも
クリスチャンはみなイエスによって自由にされてはいるが
その自由を行使しようとして反抗するのではなく
イエスがされたように敵を愛し寛大であることによって
悪に立ち向かうようにと言いました
主人もクリスチャンの家庭だと話はまた別です
彼らは妻を神の前に対等で尊敬に値する存在と見なしているので
ローマの家庭の常識とは全く違う接し方をします
ペテロはこのようなイエスの愛にならう逆転の王国の価値観が
彼らの言葉に力を与え神のあわれみを証しし
イエスの教える生き方を示すと期待しています
しかしペテロは現実も忘れていません
クリスチャンへの迫害が続くことを知っていたので
彼らが将来やがて回復させられる事を教えます
イエスご自身が不当に迫害され墮落した人たちによって
殺されたことを思い出させています
しかし実はイエスは敵の罪のために死なれ
後に高くあげられ聖霊によってよみがえりのいのちを受けたのです
そしてイエスは今やすべての人間や
霊的な存在の上に君臨する王として高められています
次にペテロは洗礼はイエスを信じる者が
やがて回復されることを示していると述べています
ノアのように彼らは水を通して救われますが
これは魔法の儀式などではなく心が変わられて
イエスの死とよみがえりに繋がる決心を表す聖なる象徴なのです
だからたとえ今イエスに従ったために殺されるとしても
彼らには将来その汚名がそそがれて
王と共に高く上げられるという希望があるのです
最後のセクションでペテロは
イエスと同じように迫害される者はそれを栄誉だと思って
喜びなさいというイエスの言葉を思い出させています
そして教会の指導者たちに苦しめられているクリスチャンに配慮し
イエスが弟子たちにされたように
仕える姿勢のリーダーシップを取るよう呼びかけています
最後にペテロはクリスチャンたちが直面している
真の敵について述べています
彼らに向けられる敵意は単に文化的政治的なものではなく
憎しみや暴力をかき立てる闇の力によるものなのです
ですからクリスチャンは
イエスとその教えに忠実に留まることによって
またやがて再臨されるイエスの究極的な勝利を待ち望み
これらの悪に立ち向かうべきなのです
ペテロは神の力を求める祈りと
彼がバビロンにたとえたローマにある教会からのあいさつで
この書を閉じています
彼はここで墮落したすべての国をバビロンと呼んだ
旧約聖書の預言者たちの伝統を引き継いでいます

つまりローマは今や新しいバビロンとなり
そこに住む神の民は
新しい創造という故郷から捕囚として連れてこられているというわけです
第一ペテロは
苦しみの中にあるクリスチャンの希望を力強く思い起こさせてくれます
神の民は最初から誤解される少数派で敵意にさらされていました
この世の王とは違う王イエスのもとで生きることを選んだからには
迫害は必然なのです
しかし迫害は教会にとっては逆説的な恵みとなり得ます
そこにイエスの驚くべき愛と寛容を示すチャンスがあるからです
そしてその原動力となるのはイエスの再臨への希望なのです
これがペテロの手紙第一です

【要約】

イエスの弟子であるペテロは、彼の新しい名前「ケファ」（アラム語で「岩」を意味する）を持ち、使徒たちのリーダーとして活動しました。ペテロが書いた「第一ペテロ書」は、ローマ帝国の複数の教会に向けて書かれ、主に非ユダヤ人のクリスチャンを励ます内容です。この手紙は異邦人クリスチャンたちが迫害や嫌がらせにさらされる中で、新しいアイデンティティと希望を見つける助けとなるように書かれました。

手紙の中で、ペテロは異邦人クリスチャンたちに、イエスを信じる者としての新しいアイデンティティを強調し、彼らは神の家族の一員であり、王国の祭司であると説きます。彼らはイエスと共に受け継いだ新しい約束の民であり、この新しいアイデンティティを深く理解し、生活の中で実践するように促します。

また、ペテロはクリスチャンたちが受ける迫害を逆説的な恵みとし、イエスの教えに従って愛と寛容の態度を保つことを奨励します。彼らは将来、イエスと共に高められ、復活の命を受けるとの希望を持っていると説き、苦しみを神に託して忍耐強く生きようにと助言します。ペテロはまたクリスチャンたちに、イエスの再臨に備えて希望を持つことと、暗闇の力に立ち向かうことを奨励します。

この手紙は、苦難の中で希望を見つけ、イエスの教えに忠実に従い、愛と寛容の心を持つことの重要性を強調しており、信仰の深化と成熟に向けた指針として役立ちます。